たぬきとろくじい

「おっかあー、たんと釣って来たぞー。」
どなって手桶をのぞいた良平さは、おったまげて尻もちついちまった。
そのはずさ、あれだけおった魚が、みな消えてなくなっちまっていた。
おかしなこともあるもんじゃ、とまた淵までやって来た。
すると、どうじゃろ！なま暖かい風がビューッと吹き、大きな蛇が淵いっぱいにとぐろを巻きながら真赤な舌を、ベロッ、ベロッと出しちょった。
良平さは男じゃもんで、ぐっと下腹に力を入れて、ビューンと矢を放った。
みごとに命中したと思うや、大蛇の姿はパーッと消え、淵はみるみる血の池になっちまった。
真赤な血が橋の下を流れる時、花が咲いたように美しかったもんで〝花川橋〟と、名がつき、良平さの釣っちょった淵は、だれ言うとのう、〝蛇が洞〟と呼ばれるようになったげな。

飯田　美智子

たぬきとろくじい

むかし、大鉞にいたずらたぬきがおった。
べつにとりたてて悪さをするというわけではないが、ちょっとしたいたずらをしては村のものを困らせた。たとえばこんなことよ。
夜おそく、ろくじいさんの表戸をトントンたたくものがおる。
「今ごろだれやいのう。」
ろくじいは戸をあけて首を出した。外は月夜で、庭も、田んぼも光って見えるが、ネコの子一びきおりゃあせん。
「おかしいな、そら耳やったろか。」
こくびをかしげて戸をしめたろくじいは、ねどこにもぐった。するとまた、トントンと音がする。だれかがたしかに戸をたたいとる。
やっこらさとじさまは起きあがって外を見る。やっぱり、だれもおらん。
「くそ、だれのいたずらじゃ。」
ろくじいは目をさまされてきげんが悪い。そこへ三度目のトントンじゃ。
じさまは足音をしのばせて裏へ出た。そうっとひとまわりして表のようすを見る。するとどうじゃ。表戸の前で後向きに立ったタヌキが、ふといしっぽでトントン戸をたたいとる。
「このイタズラタヌキめ。」
ろくじいの大声でタヌキはびっくらこいて、月の光の中をとんでった。

それからしばらくしてのことやった。
秋のとり入れがはじまって、あしたはいねかりと、ろくじいは空を見た。
「どうも思わしゅうない、あしたは雨かな。」
どんよりした天気を気にしながら家に入った。
よく朝、まだ夜のあけきらんうちに「ろくさ」「ろくさ」と呼びながら戸をたたく音で、じさまは目をさました。
「おう、なんじゃ。」
と返事をすると、
「ろくじい、いねかりじゃ起きんかい。」
と表の声がいう。
「ああ、天気はどうじゃいのう。」
ろくじいは気がかりな空もようを聞いた。

「雨がぼよう、ぼよう降っとるがの。」
表の声がそういったので、がっかりしたじさまは、
「雨ふりじゃしょうがないわ、もうひとねむりするか。」
と、またねどこにはいっちまった。
どれだけねこんじまったことやろな。やけに戸をたたく音で、ろくじいはとびおきた。表戸をあけてみると、となりの嫁ごじゃ。
「ろくじい、この天気にいつまでねとるじゃ、どうかしたかいの。」
そういわれて空を見た。
こりゃどうじゃ、すっからかんの青天じょう、雨どころか、雲ひとつありゃせん。
じさまは、きょとんと、となりの嫁ごと空を見くらべた。そのまのぬけた顔を見て、嫁ごはあきれたように、
「どうさっした。何ねぼけてござる。」
「雨はふらなんだかのう。」
じさまがそういうと、嫁ごは、ろくじいもとうとうぼけさしたわいな、という目で、
「雨、雨がいつ降ったて。」
と聞きかえした。

「けさ、だれやらが表で、雨がぼよう、ぼよう降っとるちゅうて。」
そこまでいうと、ろくじいはいつかの晩のタヌキのふといしっぽを思い出した。
「しまった。あのタヌキじゃ。」
ろくじいの目ん玉がでんぐりかえって、口がへの字にまがった。
それから先の話は、もういわんでもよいがの。
いちぶしじゅうを聞いた嫁ごは腹をかかえて笑いながら自分の家にとんでった。そして、ろくじいが、タヌキにだまされてねむりほうけた話は村中にしれわたった。

宮坂　久仁夫